

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK290701
種別	調査報告
タイトル	成人の同一話者を41年間追跡した共通語化研究
Title	Statistical Analysis of a Panel Study on Language Standardization of Dialect in a 41-year Longitudinal Survey
著者	横山 詔一, 中村 隆, 阿部 貴人, 前田 忠彦, 米田 正人
Author	YOKOYAMA Shoichi, NAKAMURA Takashi, ABE Takahito, MAEDA Tadahiko, & YONEDA Masato
掲載号	29巻7号
発行日	2014年12月20日
開始ページ	241
終了ページ	250
著作権者	計量国語学会

調査報告

成人の同一話者を 41 年間追跡した共通語化研究

横山 詔一 (国立国語研究所)
中村 隆 (統計数理研究所)
阿部 貴人 (国立国語研究所)
前田 忠彦 (統計数理研究所)
米田 正人 (国立国語研究所)

要旨

国立国語研究所と統計数理研究所は、山形県鶴岡市で共通語化の大規模な経年調査を 1950 年から実施している。そのデータのうち、成人の同一話者を約 20 年間隔で 41 年間にわたって追跡した経年調査データに着目し、時間経過とともに音韻とアクセントの共通語化がどの程度進むのかを統計的に検討した。その結果、アクセントについては調査年の効果に有意差がみられ、言語形成期を過ぎた成人でも年齢を重ねるにつれて共通語化が進行することが明らかになった。このことから、「言語形成期に習得した言語体系が現在の言語使用に反映されている」という仮定は、アクセントの共通語化については支持されないと考えられる。一方、音韻については調査年の効果に有意差はなかった。音韻の共通語化に関しては、言語形成期に習得した言語体系が現在の言語使用に反映されていると言える。

キーワード：共通語化，方言，実時間調査，追跡データ，アクセント変化，音韻変化，言語形成期

1. はじめに

1.1 言語の大規模経年調査

国立国語研究所と統計数理研究所は、山形県鶴岡市で「地域社会における方言の共通語化」に関する実態調査を経年的に実施してきた。鶴岡市は図 1 に示すように山形県の庄内地方南部に位置する。旧鶴岡藩（通称、庄内藩）の城下町で、文化・経済の中心都市として栄えた。

鶴岡市で 1950 年の第 1 回調査から約 20 年間隔で 2011 年まで 4 回行われた調査は、住民基本台帳などにもとづく無作為抽出サンプルを中心とした大規模なものである。世界中の言語変化に関する調査のなかで、鶴岡調査はデータの質と量の両面で群を抜いている。サンプリング調査はいずれも約 400 名前後を対象としたほか、同一人物への追跡調査（以下、パネル調査ともい



図 1 鶴岡市の位置

う)もおこなってきた(国立国語研究所, 1953, 1974, 1994, 2007)。

同じような調査デザインにもとづく言語調査はもう一つ存在する。それは国立国語研究所が愛知県岡崎市で過去3回おこなった大規模な「敬語・敬語意識の調査」である。第1回調査は1953年に、第2回調査は1972年に、第3回調査は2008年に実施された。鶴岡調査や岡崎調査で収集された経年調査データは、言語変化や言語生活の推移をとらえるのに有用である(横山・真田, 2010; 横山・朝日・真田, 2008)。以下、鶴岡調査における音韻とアクセントの結果を報告する。

1.2 見かけ上の時間と実時間

図2はChambers(1998, 2006)がカナダGolden Horseshoe地域で調査したデータである。グラフの縦軸は英語の動詞sneakの過去形としてsneakedではなくsnuckが使用される率を、横軸は年代層(世代)を示す。

ここで言語形成期(以下、臨界期あるいは言語習得期ともいう)の重要性に着目して「言語形成期に習得した言語体系が現在の言語使用に反映されている」という仮定をおくと、snuckの使用率が急激に増加したのは約50年前であったと推定できる。その理由は次の通りである。図2

でsnuck使用率の伸びが最大になっているのは60歳代から50歳代までの区間である。言語形成期は10歳前後だといわれていることから、60歳をすこし過ぎた年代層が言語形成期を迎えたのは、60歳から約10年をマイナスした約50年前と考えてよいだろう。約50年前に、その地域社会でのsnuck使用率が急速に増加したと考えられる。

言語変化に関する計量的研究の方法論は「見かけ上の時間(apparent time: 見かけの時間ともいう)」によるものと「実時間(real time)」によるものに大別できる。見かけ上の時間による言語変化研究においては、言語形成期に習得した言語体系が現在の言語使用に反映されているという仮定のもと、1回の共時的調査から過去の言語使用の姿を通時的に推定しようとする。その典型が図2に示したような研究である。一方、実時間による言語変化研究においては、実際の時間経過にそって経年調査をおこなう。

1.3 分析の観点

一般に、実時間による研究は手間やコストが大きく実現が困難であるため、見かけ上の時間による研究がよくおこなわれてきた。見かけ上の時間による研究は、言語形成期に習得した言語体系が現在の言語使用に反映されているという、いわば定説ともいえる仮定の上に立脚している。しかし、この仮定が共通語化においても成立することを実証的に示した研究はいまだ存在しない。この仮定の妥当性を直接的に検証する唯一の方法は、実時間調査だと考えられる。ある方言話者の成人後の共通語化を数十年間にわたって追跡し、言語使用の変化を実時間で経年的に観測することが必要不可欠である(以下、このような調査方法を縦断調査ということがある)。言語使用に変化がなければ、この仮定は妥当だと

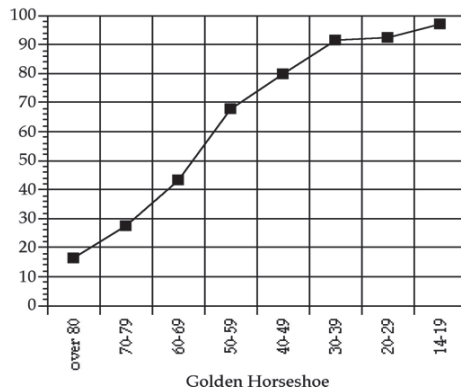


図2 カナダ英語における語形交替の例

判断できる。変化する場合は、この仮定は妥当性を欠くという結論になる。

そこで、本研究は 41 年間の追跡データを分析することにより、同一話者の言語使用に経年変化が生じているのか否かを計量的に検証する。追跡データは、鶴岡調査の第 1 回調査（1950 年実施）から第 3 回調査（1991 年実施）まで 3 回連続で参加した「鶴岡ネイティブ」の成人 38 名のデータが中心になる。ここで鶴岡ネイティブとは、言語形成期を鶴岡市で過ごした話者を指す。

着目する要因の一つは「調査年」である。ある話者集団の成人後の共通語化をほぼ 20 年間隔で 3 回にわたって追跡したデータを統計的に検定することにより、調査年が新しくなると共通語化が進むのか、変化はないのか、方言化するのか、いずれであるかを判定する。言語形成期を過ぎた同一話者の共通語化を 40 年間以上追跡し、しかも統計的検定に耐えられる話者数を確保できた研究は海外には存在しない。

もう一つの要因として「性差」を取り上げる。海外の先行研究によれば、女性の方が男性よりも共通語を志向する傾向が強く、言語変化をリードするという報告がある（Labov, 1972; Trudgill, 1974; Macaulay, 1978; Newbrook, 1986）。よって、鶴岡市における共通語化についても性差を検討することにした。同一話者を追跡したデータを用いて、共通語化における性差を実時間で分析した研究はいまだ皆無である。

2. 調査デザイン

2.1 扱うデータの範囲

第 1 回調査（1950）に参加した話者のうち第 4 回調査（2011）までの 61 年間で 4 回連続して追跡に成功し、かつデータを収集できたのはわずか 4 名であった。生存者が少ないことと、生存者が高齢化しているなどの問題により、4 回連続参加者のデータの収集は困難をきわめ、統計的な分析は断念した。したがって、本研究は第 1 回から第 3 回までの調査結果を報告し、以降は第 4 回調査のことにはふれない。

2.2 ランダム調査とパネル調査

鶴岡市における第 3 回調査までの人口は、第 1 回調査（1950 年）が約 96,000 人、第 2 回調査（1971 年）が約 95,000 人、第 3 回調査（1991）が約 100,000 人であった。このように鶴岡市は大きな人口変動のない、日本に点在する中小都市の典型である。

鶴岡調査のデザインを図 3 に示す。ランダムサンプルは、住民基本台帳などから系統抽出法により話者をサンプリングしたものである。一方、パネルサンプルは、ランダムサンプルに当たった話者をその後も経年的に追跡したものである。以下、パネルサンプルを「同一話者」あるいは「追跡データ」と呼ぶことがある。

図 3 と同じ調査デザインは、生涯発達心理学や老年学でも採用されることがあり、「コウホート系列法（cohort sequential method）」と呼ばれている。図 3 のよう

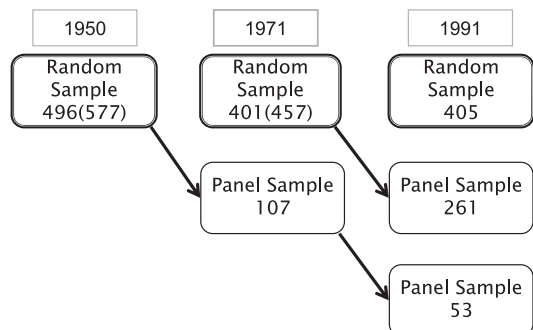


図 3 サンプル調査とパネル調査の構成

なコウホート系列法は、時代効果、加齢効果、世代効果の3者を分離可能な「もっとも効率的な調査法」として諸学界から高い評価を受けているが、鶴岡や岡崎の調査のほかには世界を見渡しても米国の「シアトル調査」があるのみのようである。これは知能の生涯変化を探る目的で実施されている大規模プロジェクトである。基本的な調査設計は鶴岡や岡崎の調査と同様で、米国シアトル市で1956年から7年ごとに経年的に行われている(Schaie, 1996; Schaie and Hofer, 2001; Schaie and Willis, 2001)。

鶴岡調査のデザインの概要は以下のとおり。

第1回調査：物資配給表を用いて話者（サンプル）をランダム抽出し、496名からデータを収集した。図3の（ ）内の数字は15歳～24歳の話者数（サンプル数）を2倍にした数値で、調査報告書（国立国語研究所，1953，1974，2007）に説明がある。

第2回調査：第1回のサンプルを追跡調査し、107名からデータを収集した。さらに、住民基本台帳を用いて新たな話者をランダム抽出し、401名からデータを収集した。追跡データとランダムデータは計508名であった。図3の（ ）内の数字は、先に述べたとおりである。

第3回調査：第1回から連続して参加してきた話者を追跡調査し、53名からデータを収集した。第2回から参加した話者も追跡調査し、261名からデータを得了。さらに、住民基本台帳を用いて新たな話者をランダム抽出し、405名からデータを収集した。追跡データとランダムデータは計719名となった。

なお、以下では第1回調査から第3回調査まで連続して参加した話者（パネルサンプル）のデータを扱うため、図3の（ ）内に示された数値等と本研究は関係がない。

3. 鶴岡ネイティブの分析

ここでは鶴岡ネイティブのデータを分析する。言語形成期に鶴岡市以外で生活していた場合、とりわけ首都圏に居住していたケースは鶴岡ネイティブではない。鶴岡ネイティブとそうではない話者（共通語ネイティブ等）が混在しないよう、言語形成期の言語環境を鶴岡方言にそろえて分析をおこなう。

3.1 方法

分析対象：第1回調査から第3回調査まで3回連続で参加した53名のうち、鶴岡市で言語形成期を過ごした話者を抽出して鶴岡ネイティブとした。本研究では言語形成期を満5歳から13歳とした。その結果、第1回調査から第3回調査まで3回すべてに参加した鶴岡ネイティブは40名（男性24名、女性16名）であった。成人後の共通語化を調べるために、第1回調査の時点で20歳未満だった2名（いずれも男性）を除外したところ、38名（男性22名、女性16名）が分析の対象となった。

要因：2要因分散分析をおこなった。分析の要因は「調査年」と「性差」の2つであった。調査年は1950年、1971年、1991年の3水準、性差は男性、女性の2水準であった。同一話者を追跡したデータであるから、調査年は群内要因、性差は群間要因である。

共通語化得点：音声に関する調査項目のうち「セナカ、ネコ、ハタ、カラス、ウチワ」の5項目については音韻とアクセントの両方のデータが記録・保存されている。そこで、発音の音韻を聴き取って共通語と同じ項目がいくつあるかを判定し、各話者の共通語化得点（0～5点）とした。アクセントについても同様であった。

調査項目の観点：音韻については次の通りである。203「セナカ：「セ」における口蓋化の有無」, 207「ネコ：非語頭におけるカ行有声化の有無」, 210「ハタ：非語頭におけるタ行の有声化の有無」, 228「カラス：ウ段音における中舌化の有無」, 231「ウチワ：イ段音における中舌化の有無」。一方、アクセントについては次の通り。203a「セナカ：共通語 LHH, 方言 LHL」, 207a「ネコ：共通語 HL, 方言 LH」, 210a「ハタ：共通語 LH, 方言 HL」, 228a「カラス：共通語 HLL, 方言 LHL」, 231a「ウチワ：共通語 LHL, 方言 LLH」。

3.2 結果と考察

男女別の生年の平均値は、男性 1917 年、女性 1913 年であった。年齢は女性の方が平均で 4 歳ほど上である。男女間で生年の平均値の差を t 検定したところ、有意差はみられなかった ($p<.17$)。男性群と女性群で平均年齢に差はないと考えてよい。次に共通語化得点を分析した結果を述べる。

3.2.1 音韻

図 4 に鶴岡ネイティブの音韻共通語化得点の平均値を示す。グラフを視察すると、女性の得点が男性を上回っている。また、男性は調査年が新しくなるほど得点が低下している（方言化している）。分散分析の結果、性差がみられ ($p<.01$)、女性が男性よりも共通語化得点が高かった。調査年は有意ではなかった。交互作用も有意ではなかった。

3.2.2 アクセント

図 5 に鶴岡ネイティブのアクセント共通語化得点の平均値を示す。グラフを視察すると、調査年が新しくなるにつれて得点が向上する。また、1991 年の調査（第 3 回）では女性の得点が男性を上回っている。分散分析の結果、調査年に主効果がみられ ($p<.01$)、1991 年の得点が 1950 年のそれよりも高くなっていた。これは調査年が新しくなると共通語化が進むことを示している。性差は有意ではなかった。交互作用も有意ではなかった。

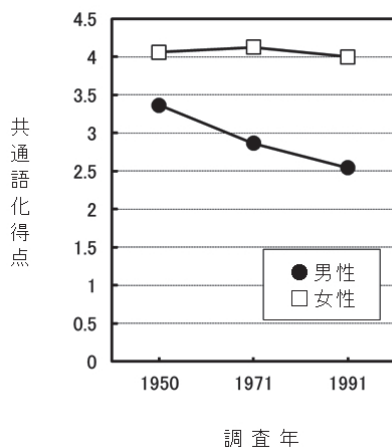


図 4 鶴岡ネイティブの音韻
共通語化得点

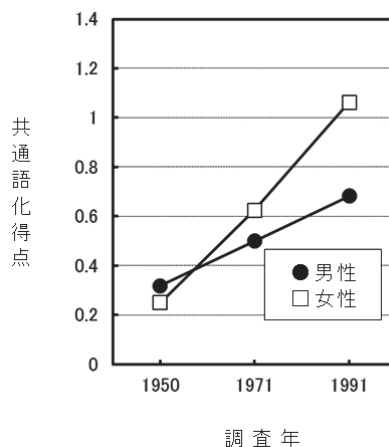


図 5 鶴岡ネイティブのアクセント
共通語化得点

以上の結果をまとめると、音韻は同一話者において調査年が新しくなっても共通語化は進行しないことが示された。一方、アクセントは同一話者において調査年が新しくなると共通語化していくことが明らかになった。「言語形成期に習得した言語体系が現在の言語

使用に反映されている」という仮定を音韻のデータは支持し、アクセントのデータは否定するという結果になった。

4. 追跡データ全体の分析【参考データ】

第1回調査から第3回調査まで3回連続で追跡できたデータの全体を分析する。追跡データは、第1回調査時に成人であった鶴岡ネイティブ38名（図4と図5のデータ）、第1回調査時に未成年であった鶴岡ネイティブ2名、そして鶴岡ネイティブではない話者13名の計53名である（横山・井上・阿部, 2010）。

4.1 方法

分析対象：第1回調査から第3回調査まで3回すべてに参加した話者53名（男性29名、女性24名）。

要因：2要因分散分析をおこなった。分析の要因は先に述べた鶴岡ネイティブの分析と同じく「調査年」と「性差」の2つであった。調査年は1950年、1971年、1991年の3水準、性差は男性、女性の2水準であった。同一話者の追跡データなので調査年は群内要因で、性差は群間要因である。

共通語化得点：鶴岡ネイティブの分析と同様にした。

4.2 結果と考察

男女別の生年の平均値は、男性1918年、女性1914年であった。年齢は女性の方が平均で4歳ほど上である。男女間で生年の平均値の差を t 検定したところ、5%水準では有意ではなかったが、有意な傾向がみられた（ $p<.06$ ）。よって、男女間で年齢の平均値に差がないとは明確に言い切れない。以下の分析で性差に有意差がみられたとしても、性差の効果なのか、年齢差の効果なのか判然としない部分が残されている点に留意すべきである。次に共通語化得点を分析した結果を述べる。

4.2.1 音韻

図6に音韻共通語化得点の平均値を示す。グラフを視察すると、女性の得点が男性を上回っている。また、男性は調査年が新しくなるほど得点が低下している（方言化している）。これは鶴岡ネイティブの図4とよく似たパターンを示している。

分散分析の結果、調査年に有意な傾向の主効果があった（ $p<.10$ ）。共通語化得点は1991年の方が1950年よりも低くなり、調査年が新しくなると方言化することが示唆された。また、性差に主効果があり（ $p<.01$ ）、女性が男性よりも共通語化得点が高かった。ただし、先に述べたように、ここでの分析では性差の効果なのか年齢差の効果なのかが分離できていないことに注意が必要である。交互作用は有意ではなかった。性差に有意差がみられた点は図4に示した鶴岡ネイティブの結果と一致する。

4.2.2 アクセント

図7にアクセント共通語化得点の平均値を示す。グラフを視察すると、調査年が新しくなるにつれて得点が向上する。性差についてははっきりしない。

分散分析の結果、調査年に主効果がみられた（ $p<.01$ ）。得点は1991年の方が1950年よりも高くなっていった。これは調査年が新しくなると共通語化が進むことを示している。性差に有意差はなかった。交互作用も有意ではなかった。これらの結果は図5に示した鶴岡ネイティブの分析結果と一致する。

ここでは、鶴岡ネイティブとそうではない話者をあわせて分析した。鶴岡市民の母集団を念頭において分析する場合は、鶴岡ネイティブではない話者を含めるのが当然のことである。ここで取り上げたデータは同一話者を鶴岡市において追跡したデータであり、鶴岡市民全体の共通語化をとらえる際には欠かせない資料だと言えよう。

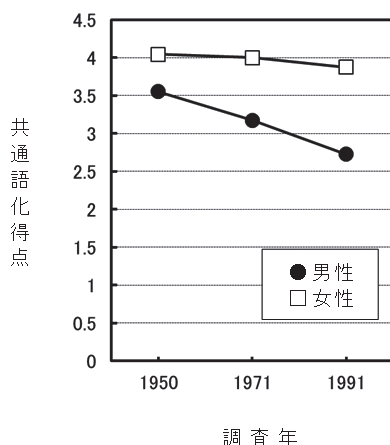


図6 音韻共通語化得点

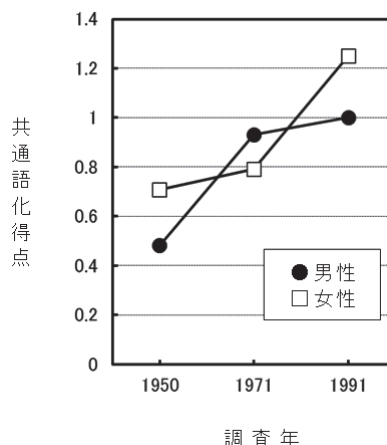


図7 アクセント共通語化得点

5. 総合的考察

鶴岡ネイティブの分析結果を中心に要約すると次のようになる。音韻の共通語化について調査年の効果は有意ではない。性差があり、女性が男性よりも共通語化が進んでいる。アクセントの共通語化については調査年の効果があり、成人後も生涯にわたって共通語化が進む。性差はない。

5.1 見かけ上の時間について

アクセントについては調査年の要因に明確な有意差がみられ、言語形成期を過ぎた後でも同一話者のなかで共通語化していくことが明らかになった。このことから、「言語形成期に習得した言語体系が現在の言語使用に反映されている」という仮定はアクセントの共通語化については妥当ではないと結論づけられる。アクセントの変化については、実時間による研究が必要不可欠だと言えよう。

一方、音韻については調査年の要因に有意差はなかった。音韻の共通語化に関しては「言語形成期に習得した言語体系が現在の言語使用に反映されている」という仮定を否定する証拠はないと考えられる。音韻の変化については、見かけ上の時間による研究が成立すると言えよう。

言語形成期を過ぎた後の言語変化については、長期間の追跡データではないが、話者の発音が言語形成期を過ぎた後も言語共同体全体の変化と同じ方向に変化するという報告 (Boberg, 2004; Sankoff, 2006) がある。また、見かけ上の時間による調査は変化の速度を過小評価する傾向があるという説 (Sankoff, 2006) も出されている。日本では、江川 (1973) が、鶴岡市における第1回調査と第2回調査のランダム調査データを用いて、言語形成期を過ぎたといわれる年齢層においても、なお共通語化が進行している可能性を指摘している。

5.2 性差について

音韻については、男性よりも女性の共通語化が進んでおり、女性が共通語を好み、共通語化を牽引するという先行研究の知見と一致した。男性の音韻では共通語化得点が低下していることから、年齢を重ねることによって方言化している可能性がある。Downes (1984) は、方言（地元の変種）の使用は 30 歳から 45 歳あたりにかけては急速に減少するが、その後は増加に転じて高年層になるにしたがって上昇すると報告している。この現象は、働き盛りの社会的活躍層が共通語（標準形）を志向・使用し、リタイア（定年退職）後は方言（地元の変種）の使用に戻るためだと説明できる (Holms, 1992)。本研究では、この傾向が男性の音韻共通語化の結果の一部に見られた。男性の活躍層は公的な社会活動に参加する機会が多く、社会的責任も大きいため共通語を志向・使用するものの、定年退職が近づくにつれて方言化していくのかもしれない。ちなみに、第 2 回調査が実施された 1970 年代の定年退職の年齢は 55 歳が一般的だった。

5.3 コウホート分析との関係

アクセントの共通語化に調査年の効果がみられた。調査年の効果は、さらに「時代効果」と「年齢効果」に分離すべきであるが、本研究のような追跡データに適用できる解析手法はまだ開発されていない。ここで時代効果とは、時代の違いによる影響を指す。鶴岡市における 1950 年調査と 1971 年調査では、テレビ普及率に格段の差があった。これは時代効果の典型例である。一方、年齢効果とは、加齢の影響を指す。1920 年生まれの人が 1950 年に調査を受けたならば年齢は 30 歳であるが、同じ人が 2011 年に調査を受けると 91 歳になっており、記憶などの認知機能に違いがある。

図 3 のようなコウホート系列法で収集したデータのうち、ランダムサンプルについては中村 (1982, 2005) のコウホート分析を適用することによって世代効果、時代効果、年齢効果の 3 者に分離できる。将来的にコウホート分析を追跡データに適用できるようになった時点で、アクセントの共通語化にみられた調査年の効果を時代効果と年齢効果に分離し、より綿密な検討がなされることに期待したい。

5.4 今後の課題

第 1 回調査がおこなわれた 1950 年と現在では「共通語」そのものが変化している可能性もある。第 4 回鶴岡調査 (2011) の「ウチワ (団扇)」の結果によれば、「伝統的な」共通語アクセントである LHL (L: Low, H: High) は減少し、LHH が多数派を占めた (ランダムサンプリング調査報告書: 統計数理研究所・国立国語研究所, 2014)。ウチワの LHH は、第 1 回と第 2 回調査では 1% に満たなかったが、第 3 回調査では約 20% に達している (国立国語研究所, 2007)。首都圏でもウチワの LHH は増加傾向を示し、「新しい」共通語アクセントの地位を固めつつあると考えられる。このような共通語の変化については、今後の研究において、さらに綿密な検討がおこなわれることを期待したい。

文献

- Boberg, C. (2004). Real and apparent time in language change: Late Adoption of Changes in Montreal French. *American Speech*, 79, 250-269.
- Downes, W. (1984). *Language and Society*. Fontana.
- 江川 清 (1973). 最近 20 年間の言語生活の変容－鶴岡市における共通語化について－言

- 語生活 257, 56-63.
- Holms, J. (1992). *An Introduction to Sociolinguistics*. Longman.
- 国立国語研究所 (1953). 国立国語研究所報告 5 地域社会の言語生活 鶴岡における実態調査 秀英出版
- 国立国語研究所 (1974). 国立国語研究所報告 52 地域社会の言語生活 鶴岡における 20 年前との比較 秀英出版
- 国立国語研究所 (1994). 国立国語研究所報告 109-1 鶴岡方言の記述的研究 第 3 次鶴岡調査報告 1 秀英出版
- 国立国語研究所 (2007). 国立国語研究所報告 地域社会の言語生活 鶴岡における 20 年間隔 3 回の継続調査
- Labov, W. (1972). *Sociolinguistic patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Macaulay, R. K. S. (1978). Variation and consistency in Glaswegian English. In Trudgill, P. (ed.). *Sociolinguistic Patterns in British English*. London: Edward Arnold. 132-43.
- 中村 隆 (1982). ベイズ型コウホート・モデル－標準コウホート表への適用－, 統計数理研究所彙報, 29(2), 77-97.
- 中村 隆 (2005). コウホート分析における交互作用効果モデル再考, 統計数理, 53(1), 103-132.
- Newbrook, M. (1986). *Sociolinguistic reflexes of dialect interference in West Wirral*. Frankfurt: Peter Lang.
- Sankoff, G. (2006). Age: Apparent time and real time. *Encyclopedia of Language and Linguistics*, 2nd edition, 110-115, Oxford: Elsevier.
- Schaie, K. W. (1996). *Intellectual development in adulthood: Seattle longitudinal study*. New York: Cambridge University Press.
- Schaie, K. W., & Hofer, S. M. (2001). Longitudinal studies in aging research. J. E. Birren, & K. W. Schaie (Eds.), *Handbook of psychology of aging*. 5th ed. California: Academic Press. 53-77.
- Schaie, K. W., & Willis, S. L. (2001). *Adult development and aging*. 5th ed. New Jersey: Prentice Hall. 【シャイア & ウィルス, 岡林秀樹 (訳) (2006). 成人発達とエイジング 第 5 版, ブレーン出版】
- 統計数理研究所・国立国語研究所 (2014). 第 4 回鶴岡市における言語調査 ランダムサンプリング調査の概要 資料編: 第 1 分冊「音声・音韻」編
- Trudgill, P. (1974). *The Social Differentiation of English in Norwich*. Cambridge University Press.
- 横山詔一・真田治子 (2010). 言語の生涯習得モデルによる共通語化予測, 日本語の研究, 6(2), 31-45.
- 横山詔一・朝日祥之・真田治子 (2008). 記憶モデルによる敬語意識の変化予測, 社会言語科学, 11(1), 64-75.
- 横山詔一・井上文子・阿部貴人 (2010). 言語生活の生涯変化は多変量解析で予測可能か: アクセントや敬語意識を例に, 日本行動計量学会大会発表論文抄録集 38, 70-73.

(2014 年 8 月 4 日受付)

Report

Statistical Analysis of a Panel Study on Language Standardization of Dialect in a 41-year Longitudinal Survey

YOKOYAMA Shoichi (National Institute for Japanese Language and Linguistics),
NAKAMURA Takashi (The Institute of Statistical Mathematics),
ABE Takahito (National Institute for Japanese Language and Linguistics),
MAEDA Tadahiko (The Institute of Statistical Mathematics),
YONEDA Masato (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Abstract:

We analyzed longitudinal survey data on language standardization of dialect in *Tsuruoka* city of *Yamagata* Prefecture, Japan. The *Tsuruoka* survey was carried out four times over 61 years, in 1950, 1971, 1991, and 2011, by National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL) and The Institute of Statistical Mathematics (ISM). We selected native speakers of the *Tsuruoka* dialect, who participated in the *Tsuruoka* survey three times over 41 years, in 1950, 1971, 1991. Participants who were under 20 years old in 1950 were not included. Using this panel data ($N = 38$) from native speakers of the *Tsuruoka* dialect, Analysis of Variance (ANOVA) was conducted. The result showed that long-term accent change tended towards standardization. However, there was no evidence that phonetic change tended towards standardization.

Keywords: language standardization, dialect, longitudinal survey, real time study, panel data, accent change, phonetic change, critical period